

# 山と博物館

第44巻 第11号 1999年11月25日

市立大町山岳博物館



「五竜岳山稜の流雲」遠見尾根—西遠見より

撮影 大石高志

## ああ大町・素敵な眺望そして縦走

小林健致

晴れた日に見渡せる後立山連峰の眺望は、いつ見上げても胸に迫る。冬の月明かりに照らされた神々しさ。春の残雪の白と青味を帯びた地肌のバランスそして雪形、それが水田に映る牧歌的なのかさ。秋の澄み切った青空と大地を、きりと縁取る稜線の鋭さ。「さあ、登って来い」と招く夏の親しさ。いつ見ても怒濤のような迫力をもって迫ってくる存在感。表現力の乏しい私はいつも「うわあ。いいなあ」の一語しかない。

生活している街の直ぐ近くにあり、しかも顔を上げると一望に眺めることができる大町は、まさにアルプス一番街。冬の寒さを心配する向きもないではないが、寒さなど、どこ吹く風と、ここアルプスの懐に住みアルプスを眺める幸せを日々感じて三年目。

憧れは見ているだけでは満足しないのが人間の心情。「よし、登ろう。ここから見渡せる唐松、五竜、鹿島、爺それから屏風のようにそそり立っている岩小屋沢、鳴沢、赤沢そして蓮華、その奥の針ノ木と、しかも続けて踏破しよう、縦走だ。」こう思うのは人の常、と私は思うのだがさにあらず、一緒に登る人を捜すのに一苦労。やとと職場の若い職員を口説いて挑戦したが、超満員の山小屋はともかく土砂降りの雨にたたれて五竜から下山したのは昨年のこと。

はやる心と、募る思いで見つづけて今年。冬のうちから折れあることに誘ったが、今年も口説き落とせたのはたった一人。前夜の二日酔いの勢いで勇んで八方尾根のリフトから降りて歩き出した。晴れたり曇ったり汗を押さえる程度の雨と、雪以外は全て有りの天候だったので気温は暑からず適当だった。

ガイド本によれば三泊四日のコースを二泊三日で踏破した。さすがに初日のキレット小屋に着いたときには疲労困憊、夕飯は喉が通らなかつたが、二日・三日目は誠に快調だった。可憐なチシマギキョウ、剣、立山、かいま見える富山湾、ひたすら歩く陶酔感、最後の針ノ木の雪渓を下つてくるときなど優勝した選手が会場一周するウイニングランのような感激と満足で足取りも軽かった。

私の好きなソバと温泉、さらに山の魅力を堪能できる大町に勤務し住んで、本当に嬉しいと喜んでいる。

(大町市立仁科台中学校校長)

# 鹿島槍ヶ岳のもう一つの魅力

## カクネ里の多年性雪渓——(前編)

赤羽 弘雄

### (1) 鹿島槍のもう一つの魅力

鹿島槍ヶ岳、それは安曇野のどこからでもその美しい双耳峰が望める標高二八八九mの後立山連峰を代表する山です(写真1)。山岳博物館のある大町から見る鹿島槍は比高二一〇〇mにも及ぶ大障壁としてそびえ立ち、ある種の気高ささえ感ずるのは私だけでしょいか。登山口となる鹿島集落の標高が約一〇五〇mほどですから山頂までの標高差は実に一八〇〇mにもおよび、上高地から奥穂高岳までの一六〇〇mをしのぐものとなっています。冬はヒマラヤひだとよばれる豪雪地帯の急峻な地形に特有な雪積が山肌を覆い(写真2)、夏には豊富な残雪が山ひだを埋め、夏山登山の



写真1 五竜岳からの鹿島槍ヶ岳  
左から北壁、北峰、吊尾根、南峰と続く

魅力を一層高め多くの登山者を集めています。その魅力について「日本百名山」の著者であり登山家でもあった深田久弥氏は、「鹿島槍は私の大好きな山である。高いところに立って北アルプス連嶺が見えてくると、まず私の眼の探すのは、双耳峰を持ったこの山である。北槍と南槍の両峰がキッとせり上がっていて、その二つをつなぐ、やや傾いた吊尾根、その品のいい美しさは見飽きることがない。(中略)一たんの良さかわかると、もう好きで堪らなくなる、そういう魅力を持った美しい姿である。魅力は何と言っても両槍とその間の吊尾根の美しさだが、殊にこの山を真横から見ると、斜めか、或いは縦に眺めた方が、いくらか冗漫に



写真2 厳冬の鹿島槍ヶ岳(遠見尾根より)  
急峻な北壁にはヒマラヤひだと呼ばれる雪積が見られ、季節風の風下側に巨大な雪庇が発達する



写真3 遠見尾根からのカクネ里の多年性雪渓  
U字谷状の谷に長さ1Kmを超える多年性雪渓が残る。冬季に卓越する季節風の風下となり、膨大な降雪が吹き溜まるとともに、北壁や急傾斜の斜面からの雪崩が雪渓を涵蓋する

思われる左右の稜線が縮まって、一層引緊まった美しさとなる。」と書いています。まさに言い得て妙といえるでしょう。

しかし、私はこれに北槍の北壁基部から北東に直線的にのびる見事なU字谷であるカクネ里を埋める多年性雪渓(写真3)の魅力も上げなければ鹿島槍の正しい魅力を表現していることにはならないと考えています。

### (2) カクネ里の多年性雪渓とは

カクネ里は鹿島川の上流の大川沢の最上流部に位置し、シラタケ沢出合からはほぼ南西に北壁の基部までほとんど直線的に二・五kmにわたってのびるU字谷です(図1)。名前の由来は平家の落人がかくれ住んだかくれ里が転じてカクネ里になったとの説が一般化していますが、定かではありません。確かにシラタケ沢出合までの大川沢は典型的な水蝕地形のV字谷となっており容易に人の廻行を許しません。カクネ里は一転して広い谷となり、落人伝説が生まれても不思議ではありません。さて、このカクネ里にはおよそ一kmにもおよぶ

長大な越年する雪渓が残ることをご存じでしょうか。山好きの方なら遠見尾根の小遠見山から中遠見山にかけての登山道からその雄大な眺めを見ることができそうですが、大町からでは北壁の一部が望めるだけで、その深い谷は決して見ることはできません(写真4)。

残雪が豊富な夏山シーズンには、あたかも氷河が削ったU字谷に今も氷河の名残を残すかのような光景が広がります。最も消耗する九月下旬から一〇月にかけての雪渓の末端は、標高一七〇m前後となり、谷のほぼ中間点から北壁の基部までが雪渓の本体となります(図2)。北壁の基部は扇のように広がり、融雪の進んだ年には表面を被うその年の残雪がすっかり融け、氷河を思わせるような氷化した氷塊が現れることがあるようです。これは、表面に氷の年層と思われる汚れ層が積層様で観察されたり、融雪水が流れることで刻んだと思われるガリー状の溝が幾筋も遠見尾根からも観察されることから間違いないことだと考えています。



写真4 大町からの鹿島槍ヶ岳(晩秋)  
北峰の右に荒々しい北壁の一部が見られるが、その基部から北東方向にのびるU字谷のカクネ里は見ることができない

(3) 多年性雪渓は日本固有のもの  
ここで、越年する残雪(氷化したものも含め)を「多年性雪渓」と表記していますが、その意味を少し説明しておきましょう。本来「渓」とは谷を指す言葉で、残雪(氷化したものも含め)そのものを指す言葉ではありません。また、「万年雪」はフィルンの訳語として使われていたが、これはあくまで「雪」であり氷化したものは含まれません。しかし、日本では一時期「万年雪」に「氷化した水塊」や「残雪により埋められた谷そのものを表す

雪渓」まで含めてしまっていることが一般化してしまっています。本来これは誤りで、現在ではスノーパッチ(雪そのものを指す)に該当する訳語を「雪渓」として雪氷学の国際用語として用いるようになっていきます。  
しかし、日本語としては明らかに「渓」は「谷」でありこれも厳密に言えば問題がないわけではありません。しかし、適当な訳語が見つからないため、「谷」の意味をなくして使うようになっていきます。また、スノーパッチには氷化したものは含んでいませんので、日本の雪渓のように一部に氷塊が見られるようなものは元来対象にはなっていないのです。この意味からも日本の雪渓が如何に世界的にみれば特異的なものであるかがわかります。越年する雪や氷化した水塊を含む日本の雪渓は、世界的にみれば極めて稀で、比較的緯度が低く、しかも冬季に多量の降雪がもたらされる環境によって作り出される固有のものということになります。  
さて、「多年性雪渓」の表記ですが、これは一九七〇年に樋口氏や五百沢氏が「多年にわたって存在する雪渓」について表記したことに始まります。これには「谷」の意味は含めていませんが、本来「万年雪」には含まれていなかった氷化した水塊の存在も含めていきます。これが現在では一般化し、日本に固有の越年する雪渓を「多年性雪渓」として表記するようになっていきます。

(埼玉県立川越女子高等学校教諭  
日本気象学会、日本雪氷学会、日本地学教育学会、教育とコンピュータ利用研究会会員)

【次号へ続く】

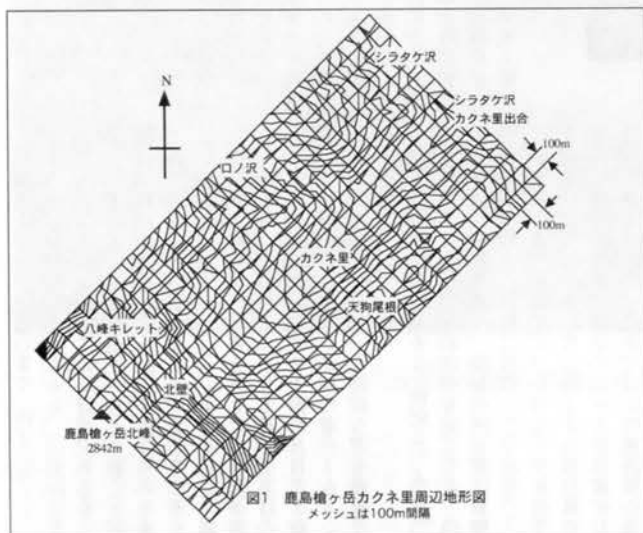


図1 鹿島槍ヶ岳カクネ里周辺地形図  
メッシュは100m間隔

↑図1

↓図2

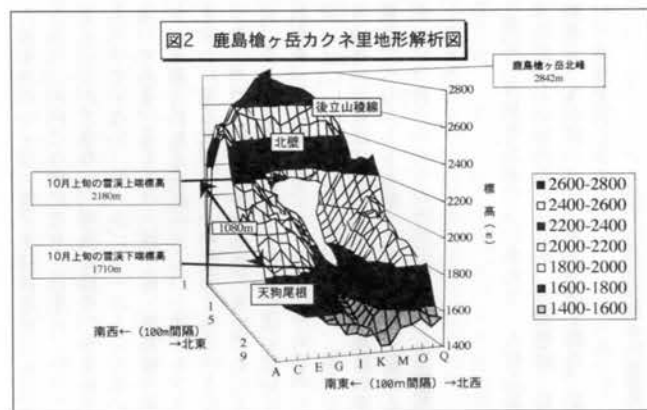


図2 鹿島槍ヶ岳カクネ里地形解析図



写真5 雪崩により涵養されるカクネ里の多年性雪渓  
融雪期になると、雪渓上には無数の雪崩による汚れが重なり合い、北壁やU字谷の急傾斜に降り積もった膨大な量の積雪がカクネ里の谷に集積し多年性雪渓を涵養する様子が見られる。また、平均斜度50度を越す北壁の基部には、無数のクレバスが開いている様子が観察される

## ウエストンと信濃大町

田畑真一

英国人の宣教師・ウエストン。明治二十一年に初来日し、日本アルプスなどの山々へ数多くの探検登山を成功させた。これにより、わが国の近代登山の高揚上、先駆けにもある功績を残した。

それに明治二十九年、ロンドンで発行した『日本アルプス—登山と探検』により、日本アルプスの存在を世界に向けて紹介した。だから、ウエストンは日本アルプスの父と賛えられる。私はもともとだと思う。

さて、明治二十七年七月、ウエストンは白馬岳（二九三三）への外国人初登頂に成功し、大町にあった旅館・山丁（後の対山館）へたどり着いた。そしてウエストンは次の記事を書き残した。

「四時には大町に着いた。ここは古風な小さな町で、その人家には、日本アルプス地方の特徴である石の重しをのせた広い屋根が、ほとんどどれもあつた。また全部南向きになっている屋根の煙出しに、障子（紙の戸）がはまっていることも奇妙な特色である。（田畑注、中略）その室は、日本式で言うと「二十七畳敷」であるが、長さ九メートル、幅五メートルくらい大きさで、私が日本の宿屋ではいっくらいなかで、一番大きな室だった。この畳は文字通りに全く一点の汚点もなかった。両側にはよく磨かれた黒木の広縁がついていたが、ここからあの偉大な山の障壁の南の部分の雄大な景観が見渡された」（岡村精一訳、平凡社、平成七年四月）

記事の一部をそのまま表現したかのような写真も添えられ、「針ノ木峠を前方に見る大町」（撮影／ハミルトン）との説明がある。私はこの写真について、三点にわたる新事

実を明らかにすることができた。

第一点は撮影月日である。ウエストンは関係の記事や写真の説明をこれ以上あげていない。しかし、ウエストンが山丁へたどり着いた月日については、川村宏・三井嘉雄の両氏の調査（『W・ウエストン年譜—山岳』第八十二年、昭和六十二年十二月）があり、明治二十七年七月二十五日であることがわかってい。つまり、同年七月二十五日のウエストンの日記には「午後四時十五分に大町に着、ヤマチヨウへ行つた」（三井嘉雄氏訳『日本アルプス登攀日記』、平凡社、平成七年二月）とある。



ウエストン著『日本アルプス—登山と探検』より

ウエストンは二十七日まで、山丁に滞在し、二十八日には出発した。だから、三泊四日を過ごしたことになる。こんな経緯があるものの、記事にもどると、山丁へたどり着くと同時に、町のようなすなわち関心を向け、「日本アルプス地方の特徴である石の重しをのせた広い屋根が、ほとんどどれもあつた」（岡村精一訳、前掲書）と書き残した。これは第一印象をもった初日、つまり七月二十五日のことであり、これがそのまま撮影月日だと断定できよう。ウエストンが同行者ハミルトンに頼み、撮影してもらった経緯なども推定できると思う。

第二点は撮影場所である。前記したように、ウエストンは山丁で三泊四日を過ごした。山丁の後身の建物であり、現在の所有者は石曾根医院（大町市八日町二五七二）である。

山丁は木造三階建てだったので、平家建てが多かった周辺にあつて、山丁からは写真のような前景の建物と背景の山々が見渡せただけである。ただ、現在では石曾根医院の周辺には二階建て、三階建てなどの建物が密集し、背景の山々の展望ができなくなった。

私は平成十一年二月十八日、現地を訪れ、背景の山々が何であるのかも調査した。その結果、左から爺ヶ岳（二六七〇）、布引山（二六八三）、鹿島楡ヶ岳（二八八九）であることがわかった。

第三点は写真の説明「針ノ木峠を前方に見る大町」についてである。ちなみに別訳には「針ノ木峠を望見する大町」（岡村精一訳、梓書房、昭和八年十二月）とか、「大町の民家の屋根越しに見る針ノ木峠」（黒岩健氏訳、大江出版社、昭和五十七年六月）とかある。大同小異だが、針ノ木峠が見えるのと一致した文意である。ウエストンの原書には「ROOFS AT OMACHI LOOKING TOWARDS THE HARINOKI-TOGE」とあり、やはり見えるのと文意である。結論からいうと、これらは誤りである。こ

の撮影場所からは、針ノ木峠は蓮華岳（二七九九）の向こう側になり、蓮華岳に隠れて見ることができない。写真にはその蓮華岳すら入っていない。明らかにウエストンの思い違いである。正しくは「爺ヶ岳・鹿島楡ヶ岳などを前方に見る大町」とか、「北アルプスを前方に見る大町」とかの説明であるべきだった。ただ、針ノ木峠をあえて書いたあたり、ウエストンには針ノ木峠への深い思い入れがあつたと断定したい。七月二十六日の日記には「ハミルトンと浦口と私は、黒岳や五六岳（訳者注、針ノ木峠近く、現在の蓮華岳）へのルートとか、人夫について尋ねるために、野口へ行つた」（三井氏訳、前掲書）とあるからだ。

〈別記〉本稿をまとめるにあたり、大町山岳博物館、石曾根医院をはじめ、奥原徳則・宮野典夫・峯村隆の諸氏からの示唆を得た。記して謝意を表します。（日本山岳会資料専門委員）

## バックナンバーのお知らせ

田畑真一氏に執筆いただいた次の巻の「山と博物館」バックナンバーがごさいます。

▽第32巻第10号（昭和62年10月）

▽第32巻第11号（昭和62年11月）

▽第32巻第12号（昭和62年12月）

▽第35巻第1号（平成2年1月）

「誤り伝えられたウエストンの写真」

## 山と博物館 第44巻第11号

発行 千〇〇〇 一九九九年十一月二十五日発行  
〒388 長野県大町市大字大町八〇五六

〒388 長野県大町市立大町山岳博物館

TEL 〇二六—二二〇一〇一

FAX 〇二六—二二〇一〇一

印刷 奥村印刷

定価 年額一、五〇〇円（送料共）（切手不要）  
郵便振替口座番号〇五〇四〇一七—一三三九三